

ミステリ読書案内

2024. 12. 4 発行元

第620号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

最近出た本の中から

最近出版された本の中から四冊を取り上げてみることにする。今回は今までのシリーズものは少ない。新たなシリーズものに発展していくのだろうかというもの。新しい作家も次々出てきてほしいものだ。

新刊単行本の危機

私の住んでいる市内で一番古くからある新刊書店。一ヶ月に一回くらいの割合で行くのだが、十月に模様替え。今まで新刊文芸書が並んでいたコーナーが手帖や日記になってしまった。文芸書の新刊単行本は奥まったところに下がってしまった。これまでも棚に空間が目立つようになり、危機感を感じていたところだった。

発刊点数が減っていることもあろうが、初版の印刷部数も抑

えられているように感じられる。初版を極力絞って、最初の売れ行きを見ながら初版印刷の冊数も細かく調整しているのではないかな…。重版にかかる本はごく限られた本だけ。あとは1～2年後の文庫になるのを待つというパターン。

この影響をまともに受けているのが地方の書店。新刊書の棚を埋めるほどの入荷がないのではないだろうか。ベストセラー本だけは平台に並べるだけの部数が来るけれども、中堅どころの作家の新刊は数冊のみ。本屋は苦勞するしかない。

愁堂れな『軽井沢探偵譚』

8月に集英社オレンジ文庫から出た本。副題は『平成元年連続殺人事件』。キャラクター小説の雰囲気だが、形の上では「本格ミステリ」の形式になっている。

軽井沢の大地主・金城一也が亡くなり、その遺産相続を巡っての連続殺人事件が発生。孫であることを知らなかった東京の会社員・佐久間隼人が主人公。急に呼び出されて軽井沢の邸宅での遺言状開示の場に。その後に関係者が毒殺、密室の中での刺殺、絞殺と続いていく。まるで『犬神家』みたい。トリックというほどのものは出てこないが、後半、意外な展開を見せるところは工夫されている。名探偵役は女装して現場に潜り込んでいるという設定。

辻村七子『宝石商リチャード氏の謎鑑定 再開のインコンパブル』

9月に集英社オレンジ文庫から出た本。シリーズ14作目になる。どんどん『謎鑑定』としてのミステリ味は薄れ、話の中心もリチャードや中田正義から離れ、物語の新たな展開を楽しむという方向性になってきている。

今回の話の中心になっているのは正義と一緒に暮らす横浜市立開帆中学校一年生の霧江みのる。彼の視点から新しくやってきたヨアキム・ベリマンとの交流を描く流れになる。ヨアキムの抱えている問題と、みのるが迫られている『将来の進路・生き方の目標』を考えるテーマ。母親が入院して精神的に不安を抱きながらも、正義たちと暮らす中で中学生として思うことが率直に綴られていく。同級生の良太や真鈴もしっかりみのるを支えてくれる。リチャードが活躍しなくとも、自然に道が…。

田中啓文『警視庁地下割烹』

9月に角川文庫から出た本。田中啓文は次々に新しいシリーズを作り出す。本書は警視庁の地下に存在する不思議な「割烹・警視兆」の話。

捜査一課で失敗続きの花菱朝彦は「警視兆」行きを命じられる。そこは割烹料理店でひたすら板前の修行をすることに…。食べに来るのは警視庁の上層部ばかり。そこで秘密の計画が練られ、朝彦は料理人として潜入捜査をすることに…。第一話の『フグに当たった男』は、永田町のフグ料理店で玉置千兵衛という国会議員がフグ毒で死亡した事件。一緒にいた客に被害はなく、なぜ玉置だけが死亡したかの謎を解明することに…。料理の話もあれこれと…。

柏木伸介『ヘンチマン・本陣村の呪い』

10月に宝島社文庫から出た本。題名も表紙絵も日本ミステリ風、横溝を思わせる雰囲気だが、読み始めると中身はハードボイルドの展開。帯には「愛媛のリュウ・アーチャー」と書かれていて、ロス・マクドナルド、チャンドラーの名前も登場する。舞台と設定は日本ミステリのおどろおどろした伝統・言い伝えを使っているけれども、事件の本質は政治家一家の内紛。『本陣』とあるが「密室トリック」が出てくるわけではない。

愛媛県政界のフィクサーとして君臨している芳賀珠美の下について調査の仕事をしている若月朔太郎が主人公。松山市内の中学二年の菅原和という生徒の母親が行方不明になったという話が担任を通じて芳賀の元に伝わり、朔太郎は調査を命じられる。調べていくと、同じく愛媛県の県議会などで力を持っている富里一族に結び付いていることが判明してくる。これに「本陣村の火炙り庄屋」の伝承話や正岡子規の短歌の「見立て」などが絡んでくるところが本書の面白いところ。